


平成25年度  
第6回宮崎県特別支援教育研究連合知的障がい教育研究部会研究大会

開催レポート

開催日 平成25年7月30日(火)  
会場 県立みやざき中央支援学校

大会テーマ「特別支援教育における専門的指導力の向上を目指して」

【日程】

9:30~10:00	受付
10:00~10:05	開会行事 会長あいさつ (みなみのかぜ支援学校)校長 田中正利
10:05~10:45	全体報告会
10:45~12:05	分科会 
12:05~13:35	諸連絡及び昼食・休憩・見学「作品・教材ひろば」
13:35~15:10	分科会

全体報告会

「総合特別支援学校としての1年間の取組」

報告者:延岡しろやま支援学校教頭 川越浩司

「地域とともに子どもたちの自立する心と力を育み、可能性を高め、未来を拓く総合的な専門教育の実現を目指す」ことを設置理念に掲げ、平成24年4月に開校した延岡しろやま支援学校は、今年度で開校2年目を迎える。本研究大会において、本校が取り組んできた1年間の内容を紹介したい。

- ・ しろやま支援学校には4つの付加機能を作った。
- ・ 子育て支援機能（地域教育支援センター）がある。箱物がある。機能に応じて部屋を使っている。サポート機関を設けている。
- ・ 自立支援機能（自立支援センター）進路指導、キャリア教育を行っている。民間人の管理職の登用を行っている。宮崎銀行の方 就労支援に力を入れて頂いている。11人を一般就労にしろやま自立支援ネットワークを立ち上げている。
- ・ 研修・啓発機能 スキルアップ講座を行っている。
- ・ 地域交流機能 学校開放機能 災害時の避難施設 リサイクル活動。
- ・ 心豊かでたくましく地域社会で生き抜く力を育成する（学校教育目標）。
- ・ オープンしながら取り組んでいる。
- ・ 教育部門の設置 ととろ部門 わかあゆ部門 たいよう部門。ととろ部門については高等部なし。
- ・ 一課程から四課程（訪問教育）までを備えている。
- ・ 訪問教育は2名利用。
- ・ ひかり学園より来校している。
- ・ 管理職5名 養護教諭3名 栄養士2名 医療的ケアのため外部から3名 一般職166名。
- ・ 正しい授業時数のとらえ方をしている。
- ・ 体育祭とスポーツテストを合体している。



- ・ 校務分掌 キャリア支援部（生徒指導、進路指導）  
20名程度で部が成り立つ。
- ・ 九州保健福祉大学と協定を結んでいる。そのため、PT ST 心理士が非常勤で勤務している。
- ・ 専門家から担任へのアドバイスをを行う。中にはケース会議を行っている。

【質疑応答】

Q：ととろ部門の子ども達は、高等部設置の要望があるのかどうか。

A：宮崎県の方針で今後設置の予定はない。在籍数が減少しているため、学部の存続が危ぶまれている。延岡学園に入学された方もいる。他県を視野に入れられている方もいる。

第1分科会 実践報告Ⅰ

「『共に生きる力』を育む授業づくり（支援のあり方の改善）」

報告者：みやざき中央支援学校 教諭 秋吉研吾 教諭 齊藤志保  
教諭 三浦志保 教諭 諏訪田祐子

近年、在籍する児童生徒の障がいの重度化・多様化・複雑化が課題の1つであり、それらに対応した教育課程の見直しや授業の改善の必要性が高まっている。そこで、24年度より3ヶ年にわたって『共に生きる力』を育む「授業づくり（寄宿舍研究班においては支援のあり方の改善）」に取り組み、各学部・寄宿舍が一丸となり、児童生徒一人一人の実態に即した指導・支援を行うとともに、地域社会や保護者のニーズにあった教育活動を模索している。

①小学部の取組

副題「子どもがもう一度やりたい」と思う授業づくり～自主性と関わり合う力の育成を目指して～と設定。生活単元学習や日常生活の指導、各教科の年間指導計画の見直し・改善そして授業づくりに取り組んでいる。

②中学部の取組

副題「生徒一人ひとりが進んで取り組む授業づくりを目指して」と設定。総合的な学習の時間や生活単元学習、各教科についての指導内容の見直しや精選、年間指導計画の作成に取り組んだ。今年度は授業実践検証や事例研究に取り組み、評価改善を図っている。

③高等部の取組

副題「生徒の実態に合った効果的な課題別学習のあり方～新教育課程の創設と移行を目指して～」と設定。教務部と連携のうえ、新教育課程を創設し、それに伴う新年間指導計画の作成に取り組んだ。新年間指導計画と自立活動実践事例集を作り上げ、今後活用の予定。

④寄宿舍の取組

副題「生活能力を高める支援のあり方はどうあればよいか～自立にむけての指導～」と設定。独自に、日常生活を送るうえで必要な基本的な生活習慣について「チェックシート」を作成し、その分析、個々の生徒の課題の明確化を図った。3年間継行い、改善を続けたい。



第1分科会 実践報告Ⅱ

「小学部の児童に必要な力の育成を目指して

～ICFの視点を活かした力の育成と支援の在り方」

日南くろしお支援学校 教諭 吉田ゆかり

いろいろな感覚を統合して行動することが難しい児童の状態を知り、感覚機能の発達を促すた

めに、教育活動のあらゆる場面で、感覚あそびを中心に『感覚統合の視点を生かした支援』ができないかを個別に事例研究を行ったとのこと。作業療法士のアドバイスを参考に、JSI-R(Japanese Sensory Inventory Revise)を使い、各感覚をチェックして点数化し、行動の特徴・特性を捉える実態把握やその後の伸びを再チェックする客観的な評価を使い、実際に変容が見られたとのことであった。感覚遊びは、情緒の安定やコミュニケーション能力、作業や学習活動への集中力にも効果があったとのこと。

質疑応答では、JSI-R の利用の仕方や出典について問われ、今後もそれぞれの学校で利用されるのではないかとされる。



### 第1分科会実践報告Ⅲ

#### 「一人一人にあった自立活動のあり方について

～日々の記録から生徒の変容を把握し次の指導へ生かすための手立て～

高鍋町立高鍋東中学校 教諭 田邊芳子

平成23年度、4名の入学と同時に開設された自閉症・情緒障がい特別支援学級での自立活動について、A子さんに焦点を当て、実際に取り組まれた様子を発表していただきました。

目指す姿から、自立活動の優先順位を決めて支援を行うことで、生徒本人の負担感を少なくし目標を明確に意識させることができたそうです。また、実態把握や保護者との連携につながる日々の記録の重要性を話され、具体的な常時指導の手立てや自立の時間の取り組みをたくさん紹介していただきました。



### 第1分科会 実践報告Ⅳ

#### 「関係機関との連携におけるコーディネーターの役割」

#### 「特別支援学校のセンター的機能を活かしたまちづくり・ひとづくり

～宮崎県高鍋町への地域支援体制構築コンサルテーション」

児湯るびなす支援学校 教諭 重黒木俊朗

幼稚園や保育園で行われてきた支援の方法や内容を小学校へスムーズに引き継ぐ事の大切さが言われている。そこで、幼稚園や保育園での支援の方法を、小学校へスムーズに引き継ぐ支援体制を構築することが子どもの教育の充実を図るために大切であると考えた。特別支援学校のコーディネーターとして、地域の関係機関と連携し就学前から小学校まで繋がる支援体制構築のためのコンサルテーションを行った。高鍋町の取組を紹介された。支援学校コーディネーターや町の福祉課・保健師・子育て支援センター・小学校コーディネーターで支援チームを結成した。子どもの情報や幼稚園・保育園の支援方法を確実に伝えるために、就学相談会・就学指導委員会・幼保小引き継ぎ会などを行い、小学校へ引き継ぐようにした。支援方法と手順は、「子どもの行動尺度」を導入して、スクリーニングを行い、観察し支援の方法を提案し、経過観察を行い、情報の提供を行うようにした。支援の実際として、落ち着きがないために集団参加が難しい子どもの支援内容や方法を小学校へ引き継いだ事例が紹介された。適切に引き継ぎがされたため、小学校で落ち着いた学校生活を送ることができた。

成果としては、地域に相談窓口ができて相談しやすくなったこと、小学校コーディネーターが参加することで支援の方法を確実に小学校へ引き継ぐことができたこと、「就学指導委員会」や「幼保小引き継ぎ会」と情報を共有することができたことである。課題としては、今後は、幼保小中高等学校の連携を充実させていくことが大切であると考えられる。



また、センター的機能を活かし、このように相談を受けて、ひとつひとつ丁寧に関わっていくことが、まちづくり・人づくりにつながっていくと考えている。



## 第2分科会 実践報告Ⅰ

「児童生徒一人一人の自立と社会参加の実現を目指したキャリア教育の充実  
～小中高一貫した支援を通して～」

「主体的な行動を引き出す効果的な支援の考察

～各研究グループの取組を通して～」

みなみのかぜ支援学校 教諭 白石千絵 道本ゆかり

キャリア教育の充実を図るために、児童生徒の「主体的な行動を引き出す指導・支援のあり方について、24年度、25年度を見通した縦割り研究班と各研究班の取組を2人の先生が報告されました。その中で、キャリア教育では、指導者主導から子ども主導へと意識を変えること、また児童生徒が主体性を発揮していく必要性を訴えられた。自立とは何かということでは、「自分もっている力を100%発揮し、他から受ける支援を最小限にした状態である」とまとめられました。小学部下学年重複グループでは、自立と社会参加実現には「子どもが変わるのではなく、指導者の支援の在り方」を作成し、指導・支援にあたり、そこでは主体性を育てることに着目し、差し替え指導に取り組んだ研究が報告されました。

質疑では、着替えさせる支援回数検証授業の1回目と2回目の時に比べて大きく減少した具体的な支援はどのようにされたのかという質問が出ました。それに対する回答は次の2つです。①身体にふれる②ジェスチャー③ことばかけ④児童生徒との距離をとるといったスモールステップを通してステップアップしていった。また、検証授業Ⅰの映像を検討し、効果的な支援、必要のない支援にわけて検討し、支援の在り方について研究を深めていきました。それを2回目の授業に活かしていったところでした。



## 第2分科会 実践報告Ⅱ

「自立や社会参加を促す指導・支援の在り方」

都城きりしま支援学校小林校

(小学部) ～キャリア教育を踏まえた日常生活の指導(性に関する指導)の在り方～

教諭 山元なぎさ

(中学部) ～キャリア教育の視点を踏まえた生徒の実態把握と教育活動の見直しを通して～

教諭 上園安二

(高等部) ～キャリア教育の視点を踏まえた作業学習の内容・方法について～

教諭 深野慶一

ここでは、「自立や社会参加を促す指導・支援の在り方～キャリア教育の視点を踏まえた教育活動の見直しを通して～」について、小学部、中学部、高等部それぞれ3名の代表教諭からの報告がありました。まず、小学部からは社会的自立を目指す上で必要であると考え「性に関する指導」についての研究報告がありました。そして、今後も保護者との連携をさらに深めながら取り組んでいきたいということでした。また、質疑応答では、性に関する指導を日常生活の指導の時間だけでなく、25分程度の学年集会でも計画的に活用しているという報告内容から、指導に適した時間についてどうあるべきかも話題となりました。中学部からは、希望に満ちた未来の計画 PATH (Planning Alternative tomorrow)の手法を用

いた取組の報告がありました。この取組によって、生徒一人ひとりの実態が整理でき、学校だけでなく他の関係機関、保護者の役割等について再認識することができたということでした。しかし、専門機関や保護者との連携については難しく、今後も工夫していきたいということでした。高等部からは、作業学習の内容・方法についての報告がありました。ここでは、「コーヒー班」「製作班(木工・紙工製品)」「環境整備班(室内清掃・庭の整備等)」と、それぞれ3つの班に分かれ、現場実習を通じた計画的な支援の在り方や補助具の利用等の具体的な取組についての説明がありました。また、質疑応答では、都城きりしま支援学校小林校の高等部は普通科高校との併設校なので、木工の準備での機械音等に配慮しなければならないということが話題になりました。



### 第2分科会実践報告Ⅲ

#### 「社会貢献を意識した授業の在り方について

～学校の教育活動と連動し、興味と関心、実態から児童の強みを伸ばす学習活動を通して～

日之影町立日之影小学校 校長 中村 憲一

発表補助 講師 森愛子

#### ○西臼杵郡の取組

- ・ 20校あるが、対象児童が1名の学校が10校。
- ・ 合同学習会の実施 保護者の参加も促している。年3回。
- ・ キャンプ体験、高千穂校での交流活動 合同学習会。
- ・ 合同学習会では、昨年度陶芸教室を行った。
- ・ 卒業進級を祝う会を行い、学校とは違った集団の機会を設けた。

#### ○児童の興味関心から捉える強みを考える

- ・ 反復力、模倣力、絵画力という特性に着目してみた。
- ・ 反復力:単純な作業の繰り返し、ちぎって貼るの繰り返しによる作品作りを行った。  
ピンセットを使って貼った。
- ・ 模倣力:モデルによる提示が有効だった。集団力を培う上でとても有効な手立てである。
- ・ 絵画力:児童が唐突に描き始めた絵。

#### ○社会貢献の点から考える。

- ・ 読書活動と関連させた。
- ・ マーブリングを活用したしおり作り。
- ・ 一つ一つを取り出し指導し、まとめて行う。



- ・ プリンターの写真用紙を使ってよく色が出るようにした。
- ・ シールを貼るのがすきななので、それを使って、名前を書かせた。
- ・ ラミネート作業に興味を持っていた。
- ・ 何となく満足そう。
- ・ またほしいと好評だった
- ・ 特性を生かした学習により、本人の強みになりつつある。社会貢献への一歩となる。
- ・ 支援学級を有している学級と、ない学級とで非常に温度差がある。



#### ○質疑応答

- ・ 日之影小学校HPを見ると学校の様子を紹介しているので、是非ご覧ください。

#### 第2分科会実践報告Ⅳ

「キャリア発達を促す教育課程の創造 ～小中高の一貫教育をめざして」

都城きりしま支援学校 教諭 川畑 慎

本講座は、都城きりしま支援学校が昨年度から取り組まれている研究の実践を報告されました。昨年度は、キャリア教育の全体計画を作成するとともに、事業所等に聞き取りを行い就労先が必要としている力を以下のように絞り込まれたようです。

【在学中に身に付けて欲しい力】

- ①人との関わりに関する力
- ②身近な生活力の向上
- ③働くことの習慣化
- ④健康の維持・体力づくり
- ⑤経済生活への参加
- ⑥趣味・生きがいつくり



そして、6つの柱についてアンケートを実施し、「人と関わる能力の向上」が最重要課題ということを経験者で共通理解したことで、一貫性のある教育の充実が図りやすくなるという成果が得られたということでした。25年度は、昨年度の成果を基に班編成を行い、抽出児童の指導・支援を通して変容する様子を記録したり、授業の時に使っている支援ツール等を画像と文章で記録したりしていくことで、「人と関わる能力」を、

- 主体性・・・支援を受けやすいように主体的に積極的に他者と関わる力。
- 広がり・・・発達段階に応じて、関わる人が広がっていくこと、また自ら広げていく力

と定義づけさらに研究を深めていく予定だということでした。

小中高の一貫という、支援学校ならではの研究がとても参考になるすばらしい発表でした。





【作品・教材紹介ひろば】

各学校の教材、作品が展示されました。多様な教材や作品で充実していました。

